

第3章 訓練総評

訓練総評

1. 訓練企画・評価について

今年度の訓練における教訓等を踏まえ、次年度以降、より実践的かつ効果的な訓練を実施するため、訓練参加者に対し、アンケートを実施した。また、一部の訓練項目については、専門的知見を有する外部機関等の有識者に評価を依頼し、効果的に実施できた点や課題について意見を得たものである。

2. 訓練評価者による評価・振り返り

(1) 評価・振り返りについて

今回、避難退域時検査・簡易除染訓練については、知見を有する者として、弘前大学被ばく医療総合研究所の職員に、傷病者等搬送訓練については、県消防保安課職員（青森消防本部から派遣）に、緊急時モニタリング訓練については、原子力規制庁六ヶ所原子力規制事務所上席放射線防災専門官及び県原子力センター青森市駐在職員に協力をいただき、評価を実施した。

また、傷病者等搬送訓練、緊急時モニタリング訓練については、参加した職員による振り返りを実施した。

(2) 訓練項目ごとの評価・振り返り

ア 避難退域時検査・簡易除染訓練

【良かった点】

- ・ 車両確認箇所検査における汚染の有無の判定後の指示・誘導や車両一時待機所における車両及び住民の誘導に関し、訓練当初は雨天のせいもあり情報共有が難しかったと思われるが、後半からは流れがスムーズになった。
- ・ 指定箇所検査担当の事前打ち合わせのなかで、「大きい声で汚染があると言ったら避難者の不安をあおるため、声に出さずに検査担当と記録担当で互いに測定値を確認してメモしよう」など、避難者の心情に即した情報共有方法について検討が行われていた。

【改善を要する点】

- ・ 車両確認箇所検査における汚染の有無の判定後の指示・誘導と車両一時待機所における車両及び住民の誘導に関して、雨天時には情報共有が特に大変になる（声が雑音で通りにくい、車の窓を全開にしづらい、トランシーバー等の電子機器類を使いづらい）ことがわかり、訓練を実施した価値があったのではないと思われる。
- ・ GMサーベイメータ等の可搬型測定器は距離・走査速度をかなり意識する必要がある。操作の習熟に努める必要がある方がわずかながら見られたため、関連団体の皆様におかれては種々の研修会等に積極的に参加していただきたい。
- ・ 誘導係および検査結果説明者に該当していた方は、住民に対するコミュニケーションをより意識する必要があると思われる。例えば、「次はあちらに行ってください」とだけ説明しているブースも見られたため、本来であれば避難者の様子を見ながら丁寧な検査結果の説明と誘導をする必要がある。より避難者の心情に即した対

応が望ましい。

- ・ 県全体のマニュアル等について、避難退域時検査会場周辺の空間線量が上昇している場合、雨に放射性物質が含まれている可能性が高く、むしろ住民を車両から降ろすことで汚染してしまう恐れがあると痛感した。運営面の準備やスタッフの健康面も踏まえ、例えば【雨天・降雪時や或いは夜間は避難退域時検査を実施しないため、UPZ・PAZ内住民には防災無線等で屋内退避を呼びかける】といった対応があってもいいのかなと感じた。

イ 傷病者等搬送訓練

【良かった点】

- ・ 養生、個人の装備については適切であった。また、時間管理もよくできていた。
- ・ 車内養生についても、雨天、強風の中でも養生が乱れることなく、適切に搬送できていた。
- ・ 放射性物質放出後の環境下でのPAZ内の放射線防護対策施設からの傷病者搬出を想定した訓練はこれまで実施してきていなかったが、手慣れた様子で対応できていた。また、声がけのやり取りがきちんとなされていた。
- ・ 放射性物質沈着後の環境下でのPAZ内の放射線防護対策施設の出入りに当たり、施設内への外気の流入を防止するためのエアロックシステムについて理解し、適切に傷病者の引き渡しを行っていた。

【改善を要する点】

- ・ 救急隊到着時に、施設内の傷病者の状態について確認していたが、実災害時には傷病者の引き渡しの手順確認やエアロック解除の際に待機を求める声掛けなどのやり取りなどの情報共有をしてもらえれば、より実践的な現場活動ができるものと思われる。

【今後に向けて】

- ・ エアロックの開閉手順は少し複雑なため、本訓練を機に十分周知してほしい。
- ・ 日ごろから顔の見える関係を築き、いざ災害が発生した際には情報共有できる関係性を築く必要がある。今後も訓練を通して関係性を築いていきたい。
- ・ 今回、県内11消防本部のうち、2消防だけが参加。本来、県内全消防が参加した上で取り組むべき課題だと認識しており、今後、原子力施設立地地域の消防本部及び県からの働きかけによって、できる限り全消防本部が参加した中で、全消防本部が自分事として原子力防災をとらえて訓練できるようにしていきたい。

ウ 緊急時モニタリング訓練

【良かった点】

- ・ 総括連絡班員は、指示書の読み上げに加え、熊への注意喚起、出発時の電話連絡とラミセスへの入力を各チームに指示していた。
- ・ 屋外活動チームの出動準備に当たり、防護服の着用に係る写真入り手順書が掲示、また机上にも置かれ、チーム員は適宜参照しつつ適切な着用ができていた。

- ・ 防護服や長靴などをサイズごとに整理しており、屋外活動チーム員が選びやすくしていたことは良好。
- ・ 防護服の脱衣を工夫しており良好。防護服等の脱衣に当たり、補助者が防護服を切断し後方から脱衣させており、汚染拡大防止が講じられていた。
- ・ 環境試料の受入に際し、屋外活動で使用した記録用紙をラミネート処理し、セミホット室内での汚染拡大防止を図っていた。
- ・ 原子力センター職員が原子力センター職員以外のモニタリング要員に解説しながら作業を進めており、手順の誤りや不備があればその場で訂正するなど、訓練として有効な取り組みが複数見られた。

【改善を要する点】

- ・ 所長による訓練開始前のガイダンスにおいて、訓練内容、想定事象及び付与情報がパワーポイントを用いて分かりやすく説明されたものの、短時間かつ内容が多いため、参加者の理解度に不安を感じた。
- ・ 指示書交付時に、施設の状況、道路情報、気象条件等は屋外活動には大変重要であるため、説明が必要。
- ・ 指示書の説明時に、代表者を中心としてチーム内で役割分担等を決めるよう促すことが望ましい。
- ・ 指示書交付に際し、全チームともリーダーは原子力センター職員であり、ある程度前提条件・知識が頭に入っている状態ではあるが、指示書を交付する職員は“わからない”要員が“わかる”ように説明をする訓練として、丁寧に説明するよう留意する必要がある。
- ・ 屋外活動チームの出動準備に当たり、チーム代表者を中心として、全員での員数確認、サーベイメータ等の動作確認が望ましい。
- ・ 長靴、オーバーシューズ等の着用場所について当初指示がなく、若干混乱が見られた。長靴は汚染前提で再利用するものであることから、清浄エリアで着脱するものではないと思われる。訓練時から習慣とすることが望ましい。
- ・ 総括連絡班は、交通状況を踏まえ迅速に迂回路を検討し指示書を修正したものの、EMC企画調整Gとの調整が見られなかった。

指示書については、EMC企画調整Gの所管であるところ、総括連絡班が修正した点については、総括連絡班内の確認不足とEMC企画調整Gとの連携不足。交通状況を踏まえた迂回路については、N I S Sなどの記録に残る形でEMC企画調整Gと調整し、指示書修正とするか否かはEMC企画調整Gの判断。ただし、指示書修正のために現場のチームが後回しになることは避けるべき。

- ・ 現地到着時は雨及び強風、無用の汚染を招きやすい状況になっていたが、防護装備の合羽を携行していなかった（サーベイチーム②）。荒天時の対応をあらかじめ確認してから出発すべきだったが、総括連絡班から一言あってもよかった。
- ・ 現地到着後に車内での手順確認、持出し資機材の選別にかかなりの時間を要していた（サーベイチーム①）。訓練ということで迅速な出動が求められる雰囲気があったかもしれないが、実際の緊急時には現場での活動時間短縮のため、現地車内

で実施していた打合せ・持出し資材の選別も含め、出発前にじっくり確認し、現地では簡単な最終確認だけで済むよう準備しておくといよい。

- ・ 屋外活動時、cold 担当が身に着けている廃棄物入れの袋が大きすぎて局舎階段にこすれ、防護服とも接触していた。悪天候もあり体表面汚染が非常に発生しやすい状態にあった（サーベイチーム②）。事前に確認の上、最適な袋のサイズを把握、資機材準備表に反映させるなど、現場での作業要領をより具体化する必要がある。
- ・ 様式としては存在する試料採取記録票が現地で使用されていない（サーベイチーム②）。記録票がなくても帰還後の分析が問題なく回っていたのであれば、そもそも記録票の必要性を見直す必要がある。
- ・ 悪天候の中、cold 担当が現場で紙マニュアルを参照し hot 担当に指示を出していた（サーベイチーム②）。わざわざ cold 担当が hot 担当に逐一指示を出すのは非効率であるし、持出物品が多くなり手が取られることで無用の汚染・被ばくをまねきかねない。現地で容易に参照できるよう、A4両面1枚程度の簡易マニュアルを作成し、ラミネート加工して携行するとよい（平時から現地機器に貼り付け、作業時 hot 担当が一人で作業できるように準備しておくとなおよい）。
- ・ 交換用捕集材を落下させてしまった（サーベイチーム②）。マニュアルを持ち出していたことで取り回しが悪くなっていたことが主要な原因と思われる。持出資機材の厳選、要員の追加、手元装備の見直しなど多方面からの対策が必要。
- ・ 土壌採取場所である電子線量計のフェンス鍵開閉時に外手袋を追加装備していなかった（サーベイチーム①）。試料採取だけでなく車外に出てから戻るまでの一連の流れの中で手袋を着脱するタイミングを検討し、マニュアルに書き込む必要がある。
- ・ 雨天であったため合羽を装備したが、そのことでタイベックスーツ表面に記載した名前が視認できなくなっていた（サーベイチーム①）。合羽前面背面にもあらかじめ名前を記載しておく必要がある。
- ・ 採取終了後、車両に試料・廃棄物を積む際の区域分けが準備されていなかった（サーベイチーム①）。出発前の確認事項として明確化するとよい。マニュアルに車内レイアウトの例示はあるものの、資機材リストに反映されていないことが要因のひとつと思われる。携行用コンテナ、廃棄物用の袋など、一部資機材は用途を明示してリストに追加するとよい。
- ・ 環境試料の受入れ・前処理に際し、台上の hot/cold の区分けは赤色テープで表示されているが、hot 試料の取扱誤りなどにより容易に cold 側が汚染される懸念があると思われる。hot 側はフード内での作業が望ましいが、東電事故の際は hot/cold 間には机上パーティションを設置し、更に hot 側は大きなポリ袋を簡易フードとして利用した事例があるため、参考としてほしい。
- ・ セミホット室ではリーダーが前処理進捗管理 Excel の入力に手を取られていた。別の要員に任せ、全体の進捗把握に携わるべきところであり、要員配置上の配慮が必要。

- ・ 測定結果のラミス入力において当初、施設選択に誤りがあり、EMC情報管理G側で確認できなかった。送信前に複数人で確認することが望ましい。
- ・ 防護服等の脱衣に当たり、マスクとキャップについては、汚染拡大防止の意識がなされていないように見受けられた。外側に汚染がある前提で拡大しないよう外すべき。マスク等の脱着時においても適時、補助者の注意喚起が望ましい。

3. 訓練参加者アンケートまとめ

訓練参加機関に対し、アンケートを実施し、次のような意見・要望等があった。

(1) 訓練項目別の意見

ア 住民防護措置訓練、傷病者等搬送訓練、物資搬送受入訓練

(老部地区放射線防護対策施設)

<住民>

- ・ 老部地区放射線防護対策施設（新設した施設）を見学できてよかった。
- ・ 老部地区の住民以外にも、老部地区放射線防護対策施設を見学させてほしい。

<参加機関>

- ・ 訓練の設定上、事情があるかと思うが、近隣住民（避難者役）の参加者をもっと多くした方が、広報効果が上がると思う。
- ・ 公共の交通機関がほとんどなく、また、参観する場所が狭いこともあり、参観人数が制限されていたため、住民や関係機関への認識共有という点で厳しいと感じた。
- ・ 初めて見た設備の中で訓練を行えたことはとても有意義な時間、体験だった。
- ・ 内容はとても良いものだったが、訓練参加者同士で、自衛隊や消防等ほかの組織との連携をしっかりと訓練・打ち合わせすべきと感じる内容だった。
- ・ P A Z内放射線防護対策施設を用いて、放射性物質により屋外が汚染されている想定のもと、施設から傷病者を運び出す訓練は、初めてだったので良かった。
- ・ 訓練実施日は厳寒または盛夏などで実施を要望。また、訓練時間は夜間または早朝などを要望（毎年でなくても構わない）。
- ・ 養生や防護服の着装について、原子力施設所在市村の消防本部以外にも、災害時に応援が加わる周辺の消防本部も覚えておく環境を作ることが重要。今後、県と相談して様々な方法で訓練等を企画することが今後の課題と考えている。
- ・ 各関係機関が原子力防災を自分事と捉え、自主性をもって訓練に望まなければ、訓練の形骸化は避けられない。できたこととできなかったことを精査・検証して次年度の訓練構想を計画したい。

イ 住民防護措置訓練（東通村体育館）

<住民>

- ・ 受付の迅速化をお願いしたい。
- ・ 初めての訓練参加で、原子力防災についてたくさん学ぶことができた。
- ・ 色々なブースがあり様々な機関が災害時のために取り組んでいることを知れた。
- ・ 体育館での可搬型陽圧防護テントの設備を見学できてよかった。
- ・ 防災士会の方々の説明が分かりやすかった。簡易トイレの使いやすさや捨て方

について知ることができた。体験してみることの必要性を感じた。

- ・ 段ボールベッドの組み立て方等体験できてよかった。構造や丈夫さに感心した。
- ・ 避難場所での説明では詳しい説明があり、避難生活に安心感を持てた。
- ・ 災害時の防災グッズや特別な設備などについて知ることができてよかった。
- ・ 日ごろからの最低限の食料品などの確保の必要性が分かった。
- ・ 原子力災害時の避難計画、防護措置の方法について理解が進んだ。
- ・ ○×クイズの説明が不足だし、話す速度が早すぎる。ゆっくり話してほしい。

<参加機関>

- ・ 避難先市町村の任務に直結する内容ではないが、広域避難する住民が、どの様な過程を経て避難して来るかを知ることは、精神面を含めた受入態勢の確立に繋がる。
- ・ ○×クイズで基礎的な知識を得ることができた。

ウ P A Z 住民避難に係る交通対策訓練（東通中学校周辺）

<参加機関>

- ・ 避難誘導の訓練に避難者役で参加したが、実際の避難は、誘導員が配置される前に始まってしまわないかと思った。今回の訓練は、発災後どれくらい時間が経った状況を想定していたのかなど、事前の設定がわかると具体的な対応が見えてくるような気がした。
- ・ 放射性物質が放出されている状況で、避難者は車の窓を閉めて、ラジオで情報収集していると想定されるため、口頭での周知はほとんど届かないと思われる。実際、車の窓を閉めているとメガホンを使った誘導案内の声が車内に聴こえづらく、視覚的な情報を増やすか、カーラジオを利用した誘導案内があればよい。
- ・ 警察単体での避難車両のレーン分けは厳しく感じたため、調整が必要。また、電光掲示板や看板、ラジオやTV等のメディアを用いた広報の必要性を感じた。
- ・ 避難者は事前にどこに避難するかわかっている前提での誘導だと思うが、実際は、そういう人ばかりではないと思うので、それぞれの行き先など、看板などで示してあげると安心するかもしれないと感じた。
- ・ 訓練で通る車道沿いに記者や関係者がおり、そちらに意識を取られ、車道沿いに設置されていた立て看板（UPZ住民は左車線、PAZ住民は右側車線を走行）を見逃した。本番では「看板を見て」とひとこと事前に伝えることも必要。
- ・ 徐行とはいえ、動いている車のダッシュボード上の避難車両認識票（PAZ・UPZの別、居住市町村を判別できる表示）を確認するのは困難。
- ・ 訓練に参加して、避難住民の方々が車両で避難する際に、自分が屋内退避（UPZ）か避難対象者（PAZ）かがわかることが大切。そのために、集合場所でPAZの方の避難車両識別票を渡して車両内に掲示させる仕組みとなっており、とても良い取り組みと感じた。
- ・ 短距離の避難ではなく、中距離（500m程度）で渋滞を想定し、時間測定を行う等の訓練がより実りある訓練と思う。
- ・ 今回は台数が少なかったためスムーズに進んだが、実際の避難住民の数を想定した交通の流れのシミュレーション等を実施し、それを踏まえた交通対策を立て

る必要があるのではないか。

- ・ 土地勘のない避難者は混乱するかも知れないと思った。
- ・ 警察から「訓練中も役場側や中学校側から一般の車両がたくさん入ってきていた。訓練中は一般の車両が入ってこられないように完全に規制すべき。」といった意見があった。実際、多くの一般車両が入ってきており、普段は対面通行の道路を一方通行として使用しているため、事故のリスクはあるように思う。
- ・ 住民避難に係る交通誘導を実施したが、レーンを分けて誘導するというのは、あまり現実的ではない。
- ・ 広報紙やIP告知端末等、さまざまな方法で原子力防災訓練の告知をしているにもかかわらず、地域住民にあまり周知されていないことが問題。
- ・ 関係者の訓練はもちろんだが、住民の危機意識を高めることも大事。

エ 衛星通信設備等設置運用訓練（東通村体育館）

<参加機関>

- ・ 県関係者により住民の方々へのアテンドがスムーズに行われていた。
- ・ 一方で、一般の方の視察と県幹部の視察が、時間・ルートが明確ではなく、さらに誘導の方の指示もなかったため、双方に満足な対応ができなかった。
- ・ 参加機関、地域住民の方に通信事業者の災害に対する取り組みを訴求できたことは大きな収穫だった。
- ・ 他通信会社の方と情報交換する事ができた。
- ・ 災害用伝言ダイヤル171及びweb171について聞き取りしたところ、聞いた事はあるが内容が分からないという方が多かったため、防災訓練等の機会を捉えPRしていきたい。
- ・ 今後の訓練の際、今回同様、住民の方々とふれあう場を設定するよう要望。

オ 船舶による住民搬送訓練（大湊港）

<住民>

- ・ 天候が悪く海上に出られなかったことが残念。
- ・ 受付や待機場所は天候等を考慮して、できれば屋内がいいと思う。

<参加機関>

- ・ 荒天により住民の方が多少濡れてしまう場面があった。
- ・ 今回、海路避難訓練において、荒天で出航できなかったのは多少残念ではあるが、結果として参加された住民が海自、海保両方の船舶の乗下船を体験できた。また、海自と海保の要配慮者への対応の違いが比較できた（海保船舶の対応を海自隊員が見学していた）ため、訓練としては充実していた。
- ・ 航行中における避難住民（特に要配慮者）のケアやペット連れの区画割りなどの訓練も必要と考えられることから、訓練時期を比較的好天が見込まれる9月～10月の実施を要望。
- ・ 避難住民を乗船口まで案内する自治体職員と巡視船との間で、乗船人数の相互確認をしていなかった。今後、同種訓練にあっては、自治体から乗船名簿（メモ

程度で可。)を巡視船担当者に手交したうえ、乗船人数を相互にカウントし、乗船漏れ等がないような手順を構築しておく必要がある。

- ・ 岸壁と住民受付が離れている関係もあり、船側（海自および海保）と県・市側との調整にややもたつきがあったように感じた。電話での調整で、その場はしのいだり、海自側としても顔を合わせた調整をすべきだった（住民受付会場へ連絡員を派出し、状況を説明するなど）。

現場到着後については、住民の方々がそれぞれバラバラになり各船舶へ乗船してもらったが、乗船時に若干の混乱が生じた（海保・海自どちらの船に乗船すればいいかわからない等の質問）。実際の避難時にも同様の事象は生起するものと考え、海自・海保側でも極力対応できる場所は対応するが、住民受付・避難誘導される職員の方にもそのあたりの交通整理を実施していただき、迅速な避難に協力いただきたい。

カ 避難退域時検査・簡易除染訓練（野辺地町運動公園）

<参加機関>

- ・ 当日は悪天候でありながらも、手順書に従い訓練をスムーズに進めることができた。実働時を考慮すると、天候も活動に影響してくる条件であるため、良い機会であると感じた。
- ・ 各行政機関、他事業者など共同で訓練でき非常に向上心が持てた。
- ・ 社内で常に対応できる人員を確保するためには、予め役割を決めておくことと、使用するマニュアル類が公開若しくは共有された状態にしておくことが望ましい。
- ・ 事前のシミュレーションや、スタッフとの打ち合わせ、検査前の物品をあらかじめ十分に用意しておくなどの対応が必要だと感じた。
- ・ 現場合わせでの臨機応変な対応のためにも訓練参加で経験を積んでおくことが大切と実感した。
- ・ 震災から一月後に福島でサーベイや除染した経験も思い出し、訓練に参加。県内の原子力事業者でも、今後数年でそういった経験を持つ人はいなくなると思うので、今回のような訓練を継続して、原子力防災訓練の経験者を醸成していく必要がある。
- ・ 原子力災害に関する教育の重要性や、訓練の案内などのアナウンスを継続的に行っていただき、若手スタッフにも関心を持っていただける機会を作してほしい。

<参集、役割分担>

- ・ 班ごとに集合（顔合わせ）を指示した際に運営側でどの班はどこへと指定があると効率化を図れると感じた。
- ・ 現場で各班のチーム長を決めていたが、事前に県側で指名して、リーダーとして自覚を持たせるように改革してほしい。
- ・ 指揮命令系統が若干不明確であり、訓練準備、訓練中、撤収時に迅速的確に動くことができなかった。

<資機材>

- ・ 資機材リストについて、事前（訓練前日）にいただけると助かる。

- ・ 訓練に必要な資機材が揃うまでに時間がかかっているため、訓練ごとに必要な資機材を台車にまとめるようにしてほしい。
- ・ 資機材台車に記号があったが見にくかったので、記号を大きくするか、カラー毎に識別し、設置場所に同色の表示をすれば、誰でも何処でも配置できるので表示工夫してほしい。
- ・ ゲートモニタ設営レイアウト図について、事前配布の資料と当日現場で配布された図が異なり、混乱が発生。装置提供元企業の指示により、装置に適した配置に現場合わせて設営したが、特定企業の支援がなくても対応できるよう、標準的な配置図を資機材に備えることが望ましい。また、事前計画から変更が生じた場合、当日の全体ミーティングでその旨を説明してほしい。
- ・ 起点となる「車両指定箇所検査場所」が確定しないとレイアウトができないため待ち時間が結構あった。また、「車両指定箇所検査場所」が確定する前に「避難退域時検査本部」が設営されたことから「車両確認検査場所」のレイアウトスペースが十分確保できなかった。
- ・ 事前配布頂いた組立説明書と、現場に配備された装置仕様（制御装置や赤外線センサ）が異なっていた。今回、装置提供元企業の指示により対応できたが、指示がなければ完成まで大幅な遅延が生じるリスクがあった。特定企業の支援に依存しない体制の構築のため、装置仕様に適合した最新の組立手順書を資機材（装置）に同梱することを希望。
- ・ 車両誘導用の誘導灯が点灯しなかった。夜間の使用を想定し、予備電池を準備することが望ましい。
- ・ 雨の日の装備について、EVA スーツ（アノラック）が適切ではないかと思うので、準備してほしい。
- ・ 雨天時の訓練であったため、綿手袋が濡れて身体が冷えたので、ゴム手袋にするなど臨機応変の対応が必要と感じた。
- ・ 雨天の場合を想定し、資材用のテントの設置など資材や物品が雨に濡れないような対策が必要。
- ・ 暗い時間帯で汚染確認することもあると思うので、両手を使ってサーベイや除染作業が行える様、ヘッドランプなどの照明が必要。

<検査記録票>

- ・ 車両検査票が雨により使用不能であった。記録が読めなかったため伝達がうまくいかなかった。濡れても大丈夫な様な素材にするなど、様々な天候を想定した装備を検討するのが良い。
- ・ 通常の紙のほかに、レーザープリンターや複合機でも様式を印刷できる PET 素材の合成紙や耐水紙も用意するか、紙は止めて防水ケースに収納したタブレット端末での記録を考えると良いのではないかな。

<車両汚染確認>

- ・ 雨の音で誘導係にうまく伝達が伝わらないなどがあった。また、各役割間との情報の伝達方法が確立されていなかったため、トランシーバー等の連絡手段があった方がよい。

- ・ 避難住民役として参加したが、検査や誘導時の説明は、わかりやすく説明した方がいいと感じた。悪天候ではありましたが聞き取りにくい場面が多々あり、何度も聞き返した。その時、避難してくる住民はさらに不安を感じるのではないかな。
- ・ 今回は実施しなかったが車両内の汚染検査要員をどの部署が担当し、どの部位を検査するのかの検討が必要。また、その際に貴重品紛失などを考慮して、運転手からの同意の有無や立会の有無なども考慮が必要と思われる。

<簡易除染>

- ・ 除染作業者は除染に使用したキムタオルを除染が終わるまで手に持ち続けていた。使用前と使用後のキムタオルを同じ手で持たなくてはならない、未使用のキムタオルが使用前に汚染してしまう可能性があるため、除染後すぐに使用済みキムタオルを放棄できる様に、腰に付けられるゴミ箱などと良い。
- ・ 簡易除染について、基準値以下にならなかった場合の携行品の取り扱いについて、以下の詳細な方針が必要。
 - ① 避難所等に携行品を養生して持っていった場合のその後の対応
(後日サーベイをするのか、開封時期等)
 - ② 衣服の一時預かり時の控え等の準備
 - ③ 携行品の一時預かり時の貴重品の対応
 簡易除染時に住民自身で取り出して管理保管の対応していただいたほうがトラブルがないかと思われる。
- ・ 雨の中での簡易除染の必要性について検討が必要。

<住民検査>

- ・ 訓練範囲の明確化が必要と感じた。具体的には、車両避難者の代表者の方等に汚染が判明した場合、車内サーベイを実施することになるが、訓練では、そこまで実施する体制とはなっておらず、車両誘導係では、本部に確認した結果、車内サーベイは実施しないとのことが判明。実際の災害発生時には、必要な対応なので、訓練においてどこまで実施するか、あらかじめ決めておくと、実際の対応でもスムーズに対応ができるのではと感じた。
- ・ 汚染検査が断続的に行われていることもあり、被検査者の同乗者の有無や手順などが検査係内で認知されていなかったと思われる。対策として、番号を書いたラミネートされたカード(同乗者有無も記載)を入域時に配布し、汚染検査時に見せてもらい、「○番汚染アリ→同乗者もいるため汚染検査要」等、識別しておくなどしてもよいと感じた。(汚染なしの場合は、出口で回収)
- ・ 住民誘導に係る一部要員の配置ポストが実施手順に記載されていなかった。配置ポストは実施手順に明記していただきたい。

<交通誘導>

- ・ 退場にあたっての誘導は非常に大事な要素。訓練であっても、出口での誘導は出た後の避難住民の行動も考慮し、丁寧に誘導すべきではないかと思う。

<今後の訓練に向けて>

- ・ 各班の振り返りがなかったことが残念。
- ・ 今後、夜間や厳冬期での実動訓練を希望。

キ 緊急時モニタリング訓練

- ・ 屋外チームとの連絡調整に用いたラミセスチャットでの通信において、書き込みを行うルームの設定等のルールをあらかじめ決めておくべきだった。
- ・ 外に行くチームに携帯電話に出ない人がいた。防護服の中に入れてしまったのかもしれない。防護服を着る前に携帯電話を道具箱などに入れさせることにしたい。
- ・ 防護服着用について、「名前のカタカナ記載」「背中への記載」「マスクの着用」が席上の説明資料では不足であるため、壁に貼り付けした掲示物と整合を図ってほしい。
- ・ 出動前の長靴及びオーバーシューズの着用について、チームで協力して長靴等のマスキングを行ったが、防護服着用後であったため、やや苦慮したところ。総括連絡班にサポートしてもらえると、出動がよりスムーズになると感じた。
- ・ 運転手のオーバーシューズについて、帰還時は降車時に着用することとされているが、出動時にも携行ではなく乗車するまでは着用するべきではないか。原子力センター屋外も汚染がある前提で、長靴の無用な汚染を防ぐことができる。
- ・ 帰還時の汚染検査タイミングの調整について、車両汚染検査が始まるまで運転手側からは汚染検査室の状況が見えないため、いつまで待てばよいのか停車した入館してよいのか等、運転手への指示を明確にすべき。入館待ち台数・人数を見える化する方法があるとよいのではないか。
- ・ 現地活動後の風除室での EVA 製防護服脱装時、ハサミ等が配備されていなかった。手順では“下が脱ぎにくい場合は裾をハサミ等で切ってもよい”となっているが、非常に脱ぎにくいというえ脱装に時間を要したことから、ハサミ等で切ることを必須であると感じた。
- ・ 測定結果のラミス入力において当初施設選択に誤りがあり、EMC 情報管理 G 側で確認できなかった。送信前に複数人で確認することが望ましい。
- ・ 今回は雨の中の訓練だったが、雪の日の場合も土壌採取の手順を定めておいていただけると迷わなくていいかなと思う。
- ・ ラミセスでの連絡が出来なかった場合に公用携帯で連絡することになっていたが、速やかな対応が出来なかった。公用携帯をコンテナから取り出すのに手間取ってしまったことが原因だったため、運転席と助手席の間など、速やかに対応できるように配置したい。
- ・ 訓練中、途中で指示書内容の変更について総括・連絡班から電話連絡があったが、電話終了後に他のチーム員に変更点を伝える手間が発生したため、スピーカーモードにしてチーム員全員が内容を共有できるようにしておくべきだったと反省。
- ・ 車内（フロアマット）の養生について、フロアマットをポリ袋で2重に包む現状の運用でマット自体の汚染は防止できるが、要員に付着して車内に持ち込まれた雨水等はマット上にとどまらず、ポリ袋表面をつたい流れ落ちて車内床面を汚染する恐れあり。ポリエチレンろ紙等の水分を吸着し透過しない素材を用いる

(広めに敷いて端を立ち上げてホチキス止めするとか)、深さのあるトレイやマットを用意する(適当な既製品があれば使い捨てのものも可)等の改善策が考えられる。

- ・ リーダーが、作業の節目ごとに、「いったん手を止めてください、説明します。」と言っており、外部から参加した者としては、とてもやりやすかった。
- ・ マニュアルでは「汚染検査済みの物品を、汚染検査未実施の帰還者が受け取り、汚染検査済みの物品を一時置きテーブルに置く」ことになっているが、帰還者が汚染されていた場合を想定して、「汚染検査員が汚染検査済みの物品を携行物品引渡用テーブルから一時置きテーブルに移動させる」に変更してはどうか。
- ・ PCによるデータ共有は、発想は良かったが、現実的にはPCへのデータ打ち込みが、かなりの時間律速になっていた。写真データの活用等を検討した方が良い。
- ・ 各班を通じてデータ共有の試みは、規制庁主導による防災訓練でも試みられていたがデータ入力法を洗練させないと却ってトラブルの原因にもなりうると思われる。スムーズな情報伝達法の検討が必要であると考えられる。
- ・ 分析記録の様式(エクセル)が、紙での記入を想定しており、PCでの入力がしづらかった。電子でのやり取りに対応した入力様式がほしい。
- ・ 天候(雨)が相まってEVA製防護服を着用しての現地活動であったが、着用機会が少ないため、有益な訓練となった。資機材取扱訓練では大概EVA製防護服の着脱は省略されるため、着用のデモだけでも実施することを検討いただきたい。

ク オフサイトセンター参集・立上訓練(東通オフサイトセンター)

<参加機関>

- ・ 訓練よりも、勉強会を先にやっていただけると効果的。
- ・ 今回は時間の関係でOFCでのお作法的な確認に留まったのもう少し実務に沿った訓練を希望。

(2) 訓練全般についての意見・要望等

ア 訓練想定、会場の設定、訓練実施日、訓練時間、視察・参観、その他訓練運営等について

<住民>

- ・ 全てがすごく良かった。原子力防災はこれまで意識したことがなかったので、意識するきっかけになった。もっとたくさんの人が参加、体験できる機会があればいいと思う。
- ・ 休日を利用し参加者を増やしてほしい。関心を持ってもらいたい。
- ・ 冬や春の時期にも訓練を開催してほしい。
- ・ 東通村老部の橋が壊れた場合の訓練を想定してほしい。

<参加機関>

- ・ 原子力防災訓練実施日付近での行事が多く調整に苦慮した。訓練や会議では、

実施に向け多くの機関の調整が必要となり、日付の融通が利かないことも理解するが、村単位では、担当課が重複し、課内での調整等が必要となる。原子力防災訓練や会議の実施日について、県の方でも調整をしていただきたい。

- ・ 住民参加型の訓練を行う場合は土日の方が、参加者が増えるのではないかな。
- ・ 参加する住民や職員の確保の観点から、訓練は休祭日の実施を希望。
- ・ 実際の災害が発生する時間は深夜なども考えられるため、参加できる方の都合が付く場合は夜間などの訓練も実施してみるとよいかもかもしれない。
- ・ 訓練参加者に現役世代が少ないと思われるので、事業者単位で訓練参加を依頼する等すると参加率が上がるのではないかな。
- ・ 住民の方々とお話しする機会があり、
「本当の有事の際は集会所までも歩いてこられない人もいるかも」
「各家一軒ずつまわって所在を確認するのか」
「総合的な連絡網はあるのか、機能するのか」
等、現実的なお話も伺えた。現在の訓練は、動ける人・話せる人・スマホが使える人ができる内容なので、そうではない場合にも備えることも重要。
- ・ 訓練運営については、住み分けをする必要がある。現在の訓練計画のスタイルでは、県の負担が大きすぎるため、災害設定については防災機関（自衛隊・海上保安庁・警察・消防など）が行うなど、工夫をしてはどうか。

イ 原子力防災訓練に対する意見・要望・今後希望する訓練等について

<住民>

- ・ 住民も参加するような訓練内容がもっとあったらいい。
- ・ 各地域で自主性をもって訓練する機会を与えてほしい。
- ・ 東通原子力発電所を対象とした原子力防災訓練を毎年続けてほしい。

<参加機関>

- ・ 避難先市町村の負担とはなるものの、一定頻度での避難計画に定めている広域避難先施設での訓練を希望。
- ・ 住民から避難先である青森市への避難（バス避難）実施を希望する声があった。
- ・ 原子力規制庁主催の緊急時通信訓練だけでなく、県の訓練でもテレビ会議システム等を使用した関係自治体と県との連携した訓練を実施することで、緊急時のシステムに触れる機会を増やしていただきたい。
- ・ オフサイトセンターと市町村災害対策本部が連動した訓練の実施を希望。